

Knowledge

IX Knowledge Inc. PR MAGAZINE
Vol.47 SPRING 2024

Report

1 **あすへの対談 安藤社長が聞く！**
歴史ほどロマンのあるストーリーはない
地元の歴史を知らずに生きていたらダメ
自分で歴史の楽しさや山城の魅力を伝えたい！
ゲスト：山城ガールむつみ(宇野 睦)さん
歴史&山城ナビゲーター

8 **[特別企画] ブレイクタイム**
AI時代を生き抜くための
思考の三原則と新しいシナリオ
齋藤 昌義氏(ネットコマース株式会社 代表取締役)

11 **わが社の匠**
トップ・エンジニアの軌跡⑦
長嶋 美穂

13 **IKIのSDGs**
アート作品のレンタルと展示で活躍の場を

14 **[コラム]**
一人ひとりがアントレプレナーシップを發揮しよう！

[今号の表紙]

鹿児島県薩摩半島の南東部にある「池田湖」は、直径約3.5km、周囲約15km、最大水深233mを誇る九州最大のカルデラ湖。湖畔に立てば、一足早く春の訪れを感じさせる菜の花畑と、別名「薩摩富士」と呼ばれる開聞岳を同時に望めます。幻の巨大生物「イッシー」が生息する神秘的な湖としても有名です。

IKI ナレッジ・レポート vol.47

令和6年4月1日発行

編集：アイエックス・ナレッジ株式会社

〒108-0022 東京都港区海岸3-22-23 MSCセンタービル

TEL.03-6400-7000(代) URL <https://www.ikic.co.jp>

本文中に掲載されている商品名およびサービス名は各社の商標または登録商標です。
本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

安藤社長が聞く！

歴史ほどロマンのあるストーリーはない



地元の歴史を知らずに生きていたらダメ
自分で歴史の楽しさや山城の魅力
伝えたい！

山城の魅力に取りつかれ、歴史・山城めぐりフィールドワークや山城バスツアーを主催、歴史・山城に関する講演や小学校へ出張授業などを通じて歴史の楽しさや山城の魅力を伝え、さらに地域の歴史資源を掘り起こし、町を元気にすべく、歴史や城を使った町おこしを展開する「山城ガールむつみ」こと宇野睦さんに、安藤社長がお話を伺いました。

山城ガールむつみ

宇野睦

Mutsumi Uno

安藤文男

Fumio Ando

山の要害性を利用し築かれた山城「金谷城」

安藤…今日は、私が理事長を務めている東京都情報サービス産業健康保険組合（以下、TJK）との接点から山城ガールむつみさんにお越しいただきましたが、この対談では、TJKに加盟する一企業の社長としてお話を伺います。よろしくお願ひいたします。

むつみ…承知しました。

安藤…早速ですが、むつみさんとTJKはどのようなきっかけでお付き合いが始まったのでしょうか。

むつみ…歴史を使った町おこしをしようという目的で発足した千葉城郭保存活用会という有志の団体があります。現在私はその副代表をしていますが、その会ではお城のお土産として「御城印」というものを出しています。御城印は御朱印のお城バージョンですね。金谷城は房総の歴史を語るのに絶対に必要なお城なの



©山城ガールむつみ

で何とかして金谷城の御城印を出したりお城の見学ができたらしめたかというこで、いろいろな知り合いのつてを通じて金谷城の跡地に建てられた保養施設、TJKリゾート金谷城さんと繋がりができたのが始まりです。

安藤…むつみさんのほうからTJKにアプローチいただいたということですか。

むつみ…はい。私や千葉城郭保存活用会のほうから連絡をさせていただき、半年くらい打ち合わせをさせていただき、御城印を作成することができました。その後は小規模の見学会開催や地元でこれだけの歴史と城があるんだという発信をTJKさんが一緒にやってくださっています。

安藤…TJK加盟企業のわれわれも金谷城の深い歴史を全く知りませんでした。

むつみ…金谷城は戦国時代に山の要害性を利用して築かれた「山城」です。堀を切ったり土塁を盛ったり地形をうまく活用して敵の侵入を阻んでいました。天守閣があるお城ではないのでなかなかイメージするのが難しいのですが、私はお城の意義は地形と立地に全ても思っています。金谷城においていえば、海が見えて船が泊められればそこに意義は残っています。あの景色だけで、私には船団が見えるような気がします(笑)。

安藤…今おっしゃったことが山城の定義ということになるのでしょうか。

むつみ…「城」というのは「土」で「成る」と

書くので、土の構造物ですね。それも軍事的な戦うという目的だけではなくて、例えば政治や経済、文化などを守るためのものなので、広義の意味でいうと土でできた構造物で民衆や政治を守る施設ということかなと私は解釈しています。

安藤…なるほど。金谷城の目の前は東京湾。そこへ何者が来たときには金谷城にいれば発見できますね。

むつみ…はい。東京湾を見下ろす立地から金谷城は海を見張り、港を管理する役目を持つ関東屈指の「海城」でもありました。後世の明治時代にも海防の要として東京湾に突き出した富津岬に西洋式砲台が作られたということは、恐らく常に海上交通の要所、東京湾の防衛としての重要な場所だったということになりますね。現に金谷城にも砲台が置かれました。金谷城は16世紀中ごろには里見実堯の居城だったと考えられています。

安藤…当時は攻めてくるのは小田原北条氏ですか。

むつみ…そうですね。戦国時代には小田原北条氏がよっちゅう来ています。海を舞台に長きにわたり抗争が繰り広げられた歴史があります。里見氏と小田原北条氏の江戸湾を挟んだ攻防戦が50年間続きました。江戸湾攻防戦というストーリーがすごく面白い場所だと思います。もっと知られて良い、貴重な歴史です。

安藤…金谷城と三浦半島は東京湾を挟んで本当に目の前です。



Guest Profile

山城(やましろ)ガールむつみ
宇野 睦 Mutsumi Uno

歴史&山城ナビゲーター
 1979年生まれ。神奈川県横須賀市出身。歴×トキ代表、三浦一族研究会副会長、一般社団法人城組副理事、千葉城郭保存活用会副代表など。歴史の楽しさや山城の魅力をイベントや講演、小学校への出張授業などを通じて伝え、さらに地域の歴史資源を掘り起こし、山城ガールむつみの愛称で歴史や城を使った町おこしを展開している。

好きなものかもしれません。土木の仕事をしている中でも、好きだった小説はずっと読み続けていました。例えば邪馬台国はどこにあるのか、チンギスハンは本当に源義経なのかとか、そういう歴史ミステリー系のもの。今読むと「アレ？」と思うところもありますが、そのときに、歴史ってアレコレと考えていいんだ、分らない部分は自分でその隙間を埋めていいんだというような楽しさを感じるようになって、そこから少し歴史に興味を持って合戦場や有名なお城などを回り出したのがお城に関わるようになる最初のきっかけでした。

安藤…われわれも金谷城の歴史を全然知りませんでした(笑)。

むつみ…自分一人でかなり熱を帯びていましたね。そして自分が地元の歴史を伝えられたらいいなと思うようになり、友達や知り合いに声を掛けて土日になし参加費をいただいで地元を知るためのツアーを始めたんです。ツアーが少し軌道に乗ってきたので、これはきっと神様の

きますからね。
むつみ…そうですね。お城を回るようになって、あるとき、琵琶湖の近くにある小谷城というお城に行きました。織田信長に攻められた浅井長政が自害したお城で、信長の妹のお市の方の悲劇の舞台ですね。でも、そこには建物が全くなかったんです。私はそのときまでお城って何らかの建物があると思っていましたので、「城っていつてもなんにもないじゃないか」と思いながら見学していました。そうしたとき、ふと見たらそこには白く石灰化したきれいな石垣が残っていて、この石垣は当時のものです、と書いてありました。その石垣の前に「浅井長政公自刃之地」という標柱があって、ここで浅井長政が自害したんだ、この石垣は当時のその場面を見ていたんだと

思った瞬間に何か衝撃が自分の中に走りまして、そこからです。建物のない城にロマンを感じたのは。それからはず石垣だけが残るお城を回り始めました。いわゆる一般的な古城とか古城址、城跡と呼ばれているところですね。
安藤…ご自宅の裏山にも古城址があったとお聞きしています。
むつみ…そうですね。小谷城で衝撃を受けて以来、全国の有名な石垣の残るお城を回っていましたが、あるとき実家に帰ってきて地図を見ていたら、どんぐり山と呼んで子どもの頃にいつも遊んでいた自

地元の歴史を知らずに生きていたら

宅の裏山に「怒田城」という名前がついていたんですね。「えっ、怒田城って何？」と。その山は吉井貝塚という関東ではけっこう有名な貝塚だったので、そのことは知っていました。でも、城だなんて全く知りませんでした。
 改めて現地に行ってみると、中世には三浦一族の城といわれていたと書かれていました。そこで、まずびっくりしました。私は三浦一族のことをほとんど知りませんでした。学校でも教わらなかったし、親も先生も知らなかったんですね。これは遠くの城に行っている場合ではない。地元の歴史を勉強しなきゃというところで、それからは地元の三浦一族や地域の歴史を調べ出しました。

当時は、まだ会社で働いていたので土日を使い趣味で回っていました。地元の三浦半島の歴史を知れば知るほど何か怒りが湧いてきました。なんでこういうことを教えてくれなかったんだ、みんなこの地元の歴史を知らずに生きていたらダメじゃん、と(笑)。

安藤…われわれも金谷城の歴史を全然知りませんでした(笑)。

むつみ…自分一人でかなり熱を帯びていましたね。そして自分が地元の歴史を伝えられたらいいなと思うようになり、友達や知り合いに声を掛けて土日になし参加費をいただいで地元を知るためのツアーを始めたんです。ツアーが少し軌道に乗ってきたので、これはきっと神様の

むつみ…直線距離で7kmくらいしかないですね。

安藤…一方で、三浦半島と房総半島に挟まれた浦賀水道は走水といわれるくらい潮の流れが半端じゃない。何かあると流されてしまうくらい厳しいところですよ。

むつみ…日本神話では、そこをヤマトタケルが渡るわけですね。その際に暴風が起こり、海が荒れて妃の弟橘媛が人身御供となって身を投げると暴風が収まったということですよ。

ところで、東京湾の大きさがちょうど琵琶湖と同じくらいだということに、地図とにらめっこして気づきました。

最近、明智光秀が築城した天津市の坂本城の石垣や堀が発見されたとニュースになりましたが、水上交通の要所だった琵琶湖の周りにはお城がたくさんあります。東京湾も同じように重要な交通網なので、数キロごとにたくさんのお城が築かれました。そのうちの一つの大きな拠点が金谷城ということですね。

歴史の隙間は自分で埋めてい

安藤…現在に至るご経歴をお聞かせいただけませんか。

むつみ…私は高校、大学と学生時代はずっとバスケットボールをやっていて、ひたすら体育会系でした(笑)。大学は

日本史での受験でしたが歴史は暗記物でなんてつまらないんだろうと思っただけだったので、そのときは全然歴史に興味がありませんでした。
安藤…大学での専攻は歴史ではないんですね。
むつみ…法学部です。もともとは文学部志望で小説家になりたいという文学少女でした。
安藤…卒業後はどこかに就職されたわけですね。
むつみ…建築関係の事務所に最初は法務で入りしましたが、現場の図面を描く人が少ないということで、図面を描くのは楽しそうだなというところから勉強して資格を取り、土木の技術者になりました。
安藤…すごい。城も土木ですね。
むつみ…土や土の断面を見たりするのが



安藤 文男 Fumio Ando

アイエックス・ナレッジ株式会社 代表取締役社長

お告げだから会社を辞めてこの普及活動に勤しもうと退社して独立したら、その二カ月後にコロナが流行り、ツアーどころじゃなくなるようなところからのスタートとなってしまったわけです。

安藤…大変な時期を過ごされたわけですね。

むつみ…ですが嘆いていてもしょうがない、家で何かできないかと考えていたときにフツと思いついたのが御城印でした。当時、御城印は西日本で人気が出始めたころでした。東日本ではあまり流行っていません、松本城のような有名なお城だけしか出ていませんでした。そんな中、私はあまり知られていない城こそ御城印を通して世に名前を出してあげたいと、変な熱意に取りつかれて。それで最初に、会社を辞めてまで私がこの道に進むきっかけとなった怒田城と三浦一族の本城といわれている衣笠城の二つの御城印を出しました。

御城印は御朱印からアイデアを発しているのですが、墨で書いた城の名前に朱色の家紋を入れたデザインのものしか当時はありませんでしたが、私は、御城印は宗教的なものではないのでカラフルにしたいと思って作りました。それがけっこう人気になり、いろいろな新聞が取り上げてくださいました。そのことがあって千葉城郭保存活用会から御城印を出していただけませんかというオファーが来て、あれよあれよという間に金谷城に繋がって

いったというわけです。

歴史ほどロマンのあるストーリーはない

安藤…お母様は舞台女優であったと伺っています。

むつみ…母は私が生まれるまで、舞台女優をしていました。私が小さい頃、母は寝る前に自分が何役も演じながら本を読んでもくれたり、創作のおとぎ話をしてくれたりして。ですから私はストーリー性のあるものがすごく好きなんです。歴史ほどロマンのあるストーリーはありませんね。

私はツアーを開催するとき、このお城は

こうです、このお寺はこうですという個々の説明だけをするといった形は取りません。点と点を全部繋いで一本の線にして、3時間なら3時間歩いたときに一つのストーリーになるようにコースとテーマを考えます。ツアーコースを作るのが仕事の中で一番好きです。ストーリーも、ただただフィクションではなくて史実と想像とは、歴史つて想像してもいいんだよ、ということを伝えます。

安藤…金谷城を解説していただいた動画も、歴史への夢が広がりました。関東・甲信越で歴史ある城としては松本城が有名ですね。

とっておき！ 山城ガールむつみ

出身地 横須賀の魅力

現在、私が育った横須賀市には米海軍と自衛隊の基地がありますが、明治時代には日本軍の軍港でもありました。観光パンフレットでは、旧日本軍の要塞島だった猿島を歴史的遺産として取り上げています。歴史をさかのぼると、結局、明治の軍港があった場所は中世、戦国時代に三浦一族が全て港にしていた場所なんです。良い港なので時代が下っても日本軍が入って来るし、アメリカ軍が入って来るしということになります。私としては歴史をさかのぼった縦軸での深みを持たせてその地域を見ていながら、観光にも歴史がうまく融合できるようにしたいなあと思っています。

例えば今の米軍基地のあるところは風光明媚な三浦氏の港で、鎌倉時代に三代將軍の源実朝や大江広元などの有名な御家人がお花見に来て三浦氏がおもてなしをしていました。また、三浦氏は夢窓疎石という高僧のスポンサーとなって、この港の近くに庵を建てて住まわせました。その庵のことが書かれた石碑が米軍の基地の中にあります。もちろん普段日本人は米軍の基地には入れませんが、現在の米軍基地の場所が、古くは三浦一族の歴史と関係があって、中世から脈々と続く歴史があることを知ってほしいです。米軍基地ができたというわけではなく、さかのぼると地域の歴史を縦軸で感じることができる。そういう発信の仕方をしていきたいと思っています。また、三浦一族は日本を代表する名族で守護、地頭に任じられて日本全国に領地を持っていますから、そういうところも子どもたちにも少し伝えたいなあと思います。

むつみ…城というとしても天守を思い浮かべますが、天守はあくまで城の一部です。私は城というのは地域を物語る全ての要素が凝縮されたセンターだと思っています。ですからお城を切り口にすればその地域の歴史が全部見えると思うんです。

なぜそこに城があるかという、街道が近くを流れていて川が流れていて海があつてという流通が見えてきます。交通の要衝であることが、城が築かれた一つの大きなポイントです。さかのぼると、城山は縄文・弥生時代の大集落や貝塚があつたり、麓には律令制の役所や寺があつたり。結局、人の営みの場所というのは変わらないうです。利便性ありきなもので。常にその土地に上書きされるように地域の歴史が育まれます。その歴史を伝えるときに、弥生時代の集落をテーマにして伝えるのはなかなか難しいので、城というキャッチーなものをテーマにして縦軸の地域の歴史を伝えたい。そう考えると、天守があるのではない全く関係ないですし、有名なお城よりも名もなきお城のほうが面白いと思います。

歴史は地域唯一のもの。元気になるための柱に

安藤…ここまでお話を伺って、地域の歴史を知ることがSDGsに繋がるものではないかと思いました。

むつみ…実は私も講演の度にいつも最後にSDGsの話をします。「住み続けられるまちづくりを」というのがSDGsの一つの目標としてありますが、私は今それを一番大事に考えています。特に今は仕事をしなくていく上で職住近接や首都圏に集まるのが絶対ではなくなっています。ではどこに住むかという、キーになるのはその地域に対する愛着や愛情、地域が持っている魅力だと思っています。

歴史がない場所というのは日本全国どこにもありません。どこにでも歴史があります。歴史という縦軸でその地域を見て、その魅力を伝えることができます。日本全国どこでも勝機はあると思つています。歴史は形のあるモノではないので、それを地域の人も忘れていくような、また聞いたことがないようなお城で作つていくというのはすごく大事なかなと思います。ですからお城や歴史はSDGsにかなり直結している気がします。

安藤…山城ガールの活動は地域おこしに繋がっているということですね。

むつみ…独立した最初は、ツアーをやつて、歴史を趣味とする人向けにガイドをやるということしか考えていませんでしたが、いろいろな地域と関わりを持つようになって、私の中のキーワードは「地域」になってきました。歴史が、地域を元気にするための一本の柱になればいいなと思つています。

歴史はその地域を語る唯一のもの、そ

の地域にしかないものが歴史なんです。土地のオリジナリティは歴史でこそ紡げる。自分が住んでいる地域の歴史を知ること地域に対する愛着や大事にしようという気持ちが育まれますので、今私は小学校の授業にお邪魔して、地域の歴史は自分に繋がる大事なことなんだよ、という話をする取り組みも行っているところです。

安藤…歴史の授業の他に、歴史と地域ということで取り組まれたことはありますか。

むつみ…歴史第一の私ですが、私は地域の観光も盛り上げなければいけないと思つています。実は岡山県の井原市とご縁ができました。御城印を発行したりしました。

井原市には井原鉄道というローカル線が走っています。井原鉄道沿線地域は小田川という川に沿い、さらには旧山陽道も並行して走る古くからの交通の要衝地です。なので、歴史的に重要な史跡が数多く現存しています。山城も点在しています。このプロジェクトでは、「井原鉄道で戦国時代をイメージするラッピング列車を走らせたい」という私のアイデアも実現し、大きな手ごたえと面白さを感じた取り組みになりました。車両まるまるラッピングデザインをさせてもらいました。

安藤…それはすごいですね。

むつみ…今実際に北条早雲(小田原)本拠を置いた北条氏五代の祖。実名は伊勢

特別企画

ブレイクタイム BREAK TIME



いま、社会が、ビジネスが、生活が、私たちを取り巻く環境が、日々刻々と急激に変化しています。その変化のスピードは凄まじく、時として自分の立ち位置がわからなくなることがあるのではないのでしょうか。そうした時代に生きる私たちの「いま」と「これから」を考える」をテーマにした特別企画「ブレイクタイム」。仕事や勉強の合間にお読みください。

AI時代を生き抜くための 思考の三原則と新しいシナリオ

齋藤 昌義氏 (ネットコマース株式会社 代表取締役)

生成AIの登場でITビジネスの 前提が変わってしまった

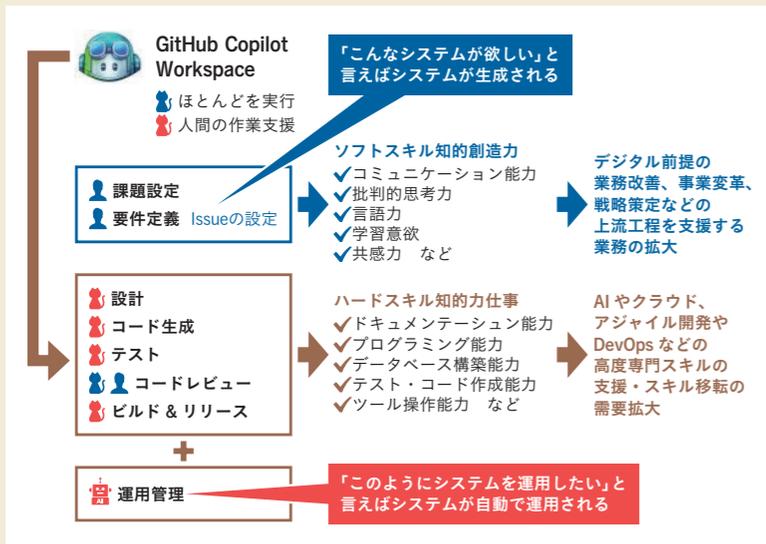
【執筆者プロフィール】



齋藤 昌義
1982年日本アイ・ビー・エム入社。営業や新規事業開発などを担当。1995年同社を退職。ネットコマース株式会社を設立し現職。多くのIT・通信関連企業新規事業の立ち上げをプロデュースするほか、講演、雑誌、Webメディア等の記事寄稿多数。著書に「システムインテグレーション崩壊」(2014)、「システムインテグレーション再生の戦略」(2016)、「【図解】コレ1枚でわかる最新ITトレンド[増強改訂版]」(2017)など。

システム開発プロセスのどこを置き換えるのかを整理したものです。生成AIの登場と進化は、この流れを更に加速しそうです。「システム開発のための工数需要を集めて収益を拡大する」そんな、ビジネスの前提が成り立たなくなる事態が起きています。ユーザー企業が、これを機に直ちに外注をやめて、内製化に舵を切るとは思えません。しかし、数年のうちには、これまでの常識を転換してしまうことは確実です。それがいつかを正確には予測できませんが、少なくとも、3年先を考える中期計画には、対策を織り込んでおくべきであることは、避けられないでしょう。

ChatGPTの登場から1年ほどで、システム開発のあり方が根本的に変わりました。例えば、MicrosoftのCopilot for Office 365やCopilotを搭載したPower Appsを使えば、コードを記述することなく、ユーザーが自分仕様のITサービスを実現することができます。また、GitHub Copilot Workspaceは、人間が書いたIssueを起点にCopilotがIssueに対応した仕様を書き、実装計画を示し、それに沿ってコーディングや既存のコードの修正を行い、ビルドをしてエラーがあれば修正まで行うという、コーディングのほとんど全ての工程をCopilotが自動的に実行してくれる、というものです。人間は各工程でCopilotから示される内容を必要に応じて修正するか、そのまま見守るのことが多くなります。このチャート(下図)は、GitHub Copilot Workspaceが、これまでと



AIが加速するSIビジネスの崩壊

あすの対談

とっておき!

山城ガールむつみ

おすすめの「山城」

まずは現在住んでいる横浜にある小机城。JR横浜線の小机駅で降りて、歩いて10分ほどで行ける山が小机城で、もう関東平野のお城です。戦国時代のお城を楽しむ醍醐味が全てその山に詰まっています。外から見ると普通の山ですが、中に入ると堀、土塁、堀を掘り残して通路にした土橋など全部のパーツが残っています。小机城を見てある程度の説明を聞くとお城を好きにならない人はいないと思うくらい、見本のようなお城です。

また東京では、世田谷城、石神井城など公園の中に一部お城の姿が残っているところがあって都会に住んでいても楽しめます。赤坂氷川神社も元お城ですし、新宿区にある筑土八幡神社も元お城ですね。その辺りのお城を地図上に落としていくと全部台地のへりにあります。おもに太田道灌の時代くらいから軍事的要素を含んだ山城がたくさん築かれるようになります。そうやって見ていくと高層ビル群とは別のイメージが浮かび、脳内で当時の町がCGで再現されるような感じになります。

のは井原市の高越城たかこしやまです。

安藤.. そうなんです。知りませんでした。**むつみ**.. そのラッピング列車は歴史に興味がない人にも乗ってみたいと思うてもらえるように、真っ黒のデザインにかなりカラフルにポップな柄を付けています。実は那須与一(源平合戦「屋島の戦い」で平家方の扇の的を射落としたことで知られる武将)は源平合戦で功を挙げた後に井原市に領地をもらっています。地元の観光課に行ったときに職員の方から、うちに全国から人を呼べるコンテンツはあるんじゃないかと聞かれたんですが、山ほどありました。特に北条早雲と那須与一という二大コンテンツがそろい踏みでした。

安藤.. 那須与一は弓の名手ですね。**むつみ**.. そうですね。ですから小さいですが、ラッピング列車には扇の的に矢が当たった絵も入っています。井原鉄道がないと地元の人には動けなくなりますので、乗客数が減っている今こそ外から乗客を連れてこなければいけないことで、歴史という地域の資源を観光と結び付けて楽しく仕事をさせていただきました。歴史は地域の財産です。

歴史は自分の身近にある

安藤.. 歴史に興味がない人に対して、歴史に目を向けるようになるアドバイスは

何かありますか。

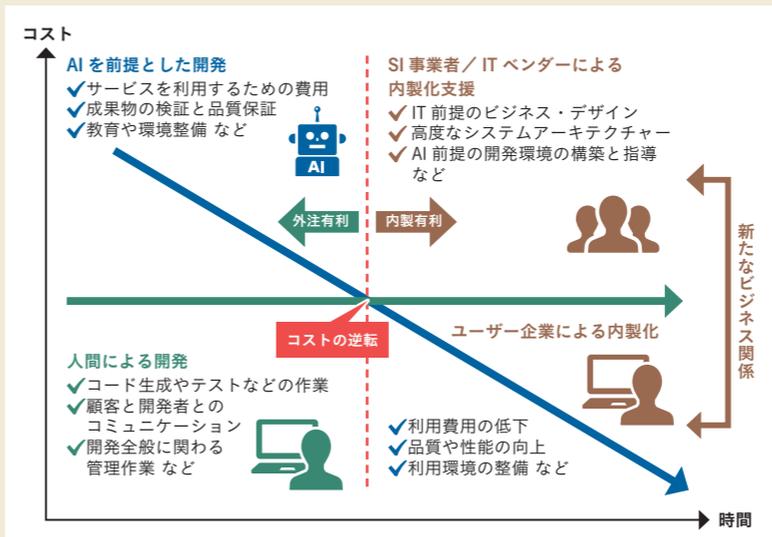
むつみ.. もともと私も歴史には興味がありませんでした。歴史に興味がない人は、歴史は自分には何の関係もない遠い昔の人の話だと思っっているんです。私が興味を持ち始めたのは自分の家の裏山が昔の城だったことを知って身近に感じたときでした。歴史は皆さんの身近に必ずあるもので、例えば通勤圏の中にある史跡への気づきなどが歴史に興味を持つ入口になるのではないかと思います。歴史が自分の身近にあるということをちよつと気にしていただくといいかなと思います。



これからの ビジネス・シナリオ

前頁のような話とともに「AIが、仕事を奪う」という話が、現実感を持って語られます。しかし、昨今のAIの動向から見えてくることは、そういうことではなさそうです。次のように考えることが、現実的であるように思えます。「AIを使いこなせる人が、AIを使いこなせない人の仕事を奪う」

AIを使うことで、仕事の生産性と品質は、大きく向上します。これを使いこなせる人／企



AI前提のシステム開発とSIビジネスの新たなカタチ

業と、そうでない人／企業では、仕事のパフォーマンスに大きな違いが生じます。お客様は、コストのいい方を選ぶのは当然です。できるかできないかによる格差は確実に広がり、できなければビジネスの機会を失ってしまいます。

また、この現実には、お客様の内製化を後押しします。技術的に難しいから、開発の人手を確保しなければならぬから、外注するわけで、その必要がなくなれば、自分たちでやれるようになります（左上図）。

「ITシステムが必要なわけじゃない、欲しいのは、ITサービスだ。ITベンダーに頼まなくてもそれができるのなら、そのほうがいい」

「ITシステムは作ったら何年も同じものを使い続けなくちゃいけない。メンテナンスの手間もかけなくちゃいけない。でも、簡単に作れるのなら、必要なときに作り、いらなくなったら捨てて、新しく作り変えればいい」

「専門家でなければできなかったことを、AIが代わりにやってくれます。コストが安いだけではありません。ユーザーのやりたいことを先読みして提案してくれます。効率やセキュリティ、コンプライアンスや法律・規制についても確認し、必要な要件を満たしてくれます。そのため打ち合わせや手続も必要ないし、見積もりをとる必要もありません。しかも、こーうじゃないか、ああじゃないかと、きめ細かく世話を焼いてくれます。そんなパートナーがいつもそばに寄り添って、仕事を手伝ってくれます。」

自分の実現したい目的の達成や課題の解決を、外部の人に頼ることなく、自分でできるのなら、それが一番良いわけです。しかし、これまでは、「ITの専門知識やスキルを持つ人たちに頼らなけ

はなく、財務や会計のデータといった形式データをも取り込み、より広範な用途での利用が期待される「マルチモデル基盤モデル」として、その応用の可能性は、大きく広がっています。そもそも、この技術の根幹をなしているのが、**深層学習**です。深層学習は…

このような深さや広がりを持って、ものごとを捉えることが、「思考の三原則」にかなう行為であろうと思います。

「理解するとは、個々バラバラな事象が、お互いに一定の関係を持つものとして見えてくる、あるいは見えるようにすること」

政治学者であり、東京大学総長を務めた佐々木毅は、著書『学ぶとはどういうことか』の中で、このように述べています。「思考の三原則」に通じる考え方はないかと思えます。

「ITを生業にしている私たちは、日々湧き起こるさまざまな言葉に翻弄されがちです。そうならないためには、「思考の三原則」に即して、言葉の背後にある本質を理解しようとする心がけが、欠かせません。相手の言葉を深く読み解き、適切な知恵や提案を示す上で、とても大切なことです。」

そんな思考回路を磨くことは、「言うは易く行うは難し」ですが、そんな理想を失うべきではありません。心がけと小さな一歩の継続が、これを可能とするのです。このような思考回路を持つことが、事業の成長や自分のキャリアを磨く上で、大いに役立つことは、言うまでもありません。

静かな終焉を待つか、 新たなシナリオを描くか

確かに、古き良き時代の常識から抜け出せ

ればできない」という壁が立ち塞がっていました。だから、ITベンダーやSI事業者には、存在意義があり、適正な対価を支払うことには、合理性があったのです。

この壁が、AIによって取り払われてしまいました。これまでと同じ理屈で、ビジネス合理性を見出すことは、できなくなりました。

このような変化が、短期間のうちに起こることへの備えはできているでしょうか。

「工数を積み上げて売上を伸ばすことではなく、圧倒的な技術力で、お客様の内製を支援することで、単金を引き上げて利益を伸ばす」そんなシナリオを描く必要があります。そのためにも、AIを武器にして、圧倒的なパフォーマンスを生み出すことも、ひとつの前提となるでしょう。

AI時代に必要な思考回路

これからAIはますます発展し、普及する時代になります。そんなAIを武器にするには、AIツールを使いこなせるだけではなく、AIの本質を見抜き、その可能性と限界を正しく理解し、これらを見通せなくてはなりません。

これは、何もAIだけの話ではありません。ITに関わる仕事をしているのなら、「ITのいまの常識」を、表面的な言葉の意味だけではなく、その本質たる思想や技術基盤、その適用と合わせて捉えるべきでしょう。また、自分の仕事や会社の事業、さらには自分のキャリアと結びつけて考える思考回路が必要です。

「終戦の詔勅」の草案作成に関わり、「平成」の元号の考案者でもある東洋思想の研究者である安岡正篤は、「思考の三原則」を表しています。

「AIの進化はまだ過渡期であり、このシナリオが直ちに実現されることはありません。ただ、ChatGPTが登場してわずか1年での技術の発展やサービスの充実を考えれば、遠い将来の話でないことは、言うまでもありません。先日リリースされた生成AIモデル裏打ちされたノウハウこそが、これからの自分たちの売り物になるのだと思います。」

AIの進化はまだ過渡期であり、このシナリオが直ちに実現されることはありません。ただ、ChatGPTが登場してわずか1年での技術の発展やサービスの充実を考えれば、遠い将来の話でないことは、言うまでもありません。先日リリースされた生成AIモデル裏打ちされたノウハウこそが、これからの自分たちの売り物になるのだと思います。

しかし、生き残り、これからも成長するという選択をしたのなら、お客様のDXや事業変革を叫ぶ前に、自分たちの足下に火がついていることに気づき、これを解決するために必死に取り組むべきです。その経験と実績に裏打ちされたノウハウこそが、これからの自分たちの売り物になるのだと思います。

AIの進化はまだ過渡期であり、このシナリオが直ちに実現されることはありません。ただ、ChatGPTが登場してわずか1年での技術の発展やサービスの充実を考えれば、遠い将来の話でないことは、言うまでもありません。先日リリースされた生成AIモデル裏打ちされたノウハウこそが、これからの自分たちの売り物になるのだと思います。

そんな時代だからこそ、「思考の三原則」に立ち返り、新たなシナリオを模索すべきでしょう。それは会社だけのことでなく、自分自身のシナリオも描き直す必要があるでしょう。

ここに述べたシナリオは、しょせんは私の幻覚（ハルシネーション／Hallucination）かもしれません。しかし、あり得るシナリオであることはまちがいないと思います。

【思考の三原則】

第一に、目先に捉われなくて、出来るだけ長い目でみる。

第二に、物事の一面だけでなく多面的にみる。

第三に、何事も枝葉末節ではなく根本的にみる。

「ITに関わる仕事をしていると、どうしても目先の製品やサービスが目につきがちです。しかし、それらがどのような課題を解決するのか、その課題は企業や社会にとって、どれほど本質的なのか、あるいは、その製品の背景にある思想や基盤となっている技術はいかなるものか、結果として、自分たちのビジネスにどのような影響を与え、自分たちは、これをどう扱えばいいのかなど、いろいろと考えを巡らせることが、「思考の三原則」にかなう向き合い方です。

ChatGPTを例にとれば、次のような思考回路を巡らせることです。

ChatGPTの基盤となる技術は、GPT (Generative Pre-trained Transformer) であり、これをチャットのアプリケーションに仕立て上げたものです。GPTは、チャット以外にもさまざまな応用が可能であり、例えば、プログラム・コードの生成、電子メールへの返信、コールセンターにおける応答など、チャットだけではなく、さまざまなアプリケーションに組み込まれています。

GPTの元になったのは、Transformerと呼ばれる自然言語処理のアルゴリズムです。この技術は、膨大なデータを事前に学習させておき、さまざまなタスクに適用できるように作られた「基盤モデル」のひとつで、言語に特化した「大規模言語モデル」と呼ばれています。

この「基盤モデル」は、自然言語に留まらず、画像や動画、音声などの非定型データだけで

「しっかりとしたモノ(システム)づくりと高品質のサービス」を掲げ、“選ばれる会社”を目指すアイエックス・ナレッジ(IKI)。この強気フレイズの裏付けは、他ならぬ人材にあります。そうした人材群をリードしてきた“IKIの現場の顔”トップ・エンジニア：今回の「わが社の匠」は、若手の頃からマネジメント職を見据え、その人柄でお客さまからもプロジェクトメンバーからも大きな信頼を得ているマネジメントの匠、長嶋美穂です。(編集部／本文敬称略)

数学が好きで大学は理系の学部に進み、数学専用のソフトウェアを使用するなど学生時代からITに触れていた。当時盛り上がりを見せていたIT業界に興味を持ち、IKIに入社。上司はその人柄を「器の大きい姉御肌」と表現する。3人の子どもを育てながら、どんなに困難な状況でもプロジェクトをしつかり推進する力は、お客さまからの評価も高い。そんな今回の匠、長嶋美穂が考えるプロジェクトマネジメントとは。

出産をきっかけに マネジメント職を目指す

教員を目指していた長嶋は、情報数理学を学んでいたこともあり、同時にIT企業に進む道も考えていた。就職活動を進める中、縁あって内定をもらったのがIKIの前身、日本ナレッジインダストリだった。大学の就職課で聞いた「女性が活躍できる会社だし、きっとあなたに向いている」という言葉に背中を押され、2000年、IKIに入社した。

そんな長嶋のターニングポイントは出産だ。入社2年目に第一子を授かった長嶋は3人の子宝に恵まれ、周囲の協力もあり3回の

また、「大学時代にチアリーダーディング部の主将を経験し、人前で話す機会は多かった」というだけあって、社内の優秀プロジェクト表彰のプレゼンテーションで、ベストプレゼン賞に選出されたことがある。今でこそ優れた交渉力を発揮する匠も、若手の頃ははつきりものが言える性格が災いし、お客さまに正直すぎる回答をしてしまうなど、伝え方に苦勞したことがあるという。答え方ひとつで相手を不安にさせたり、自分が動きにくくなったりすることがある。こうした経験の積み重ねがあったからこそ、「判断に迷ったときは、すぐ答えを出さずに持ち帰って周囲の人に相談する」という教訓を後輩たちにも伝えている。

「品質」を求めるマネジメントへ

自身の強みだという「精神力の強さ」は、プロジェクトを完了に導く推進力に繋がっている。そんな長嶋にも心が折れそうになったことがあった。グループマネジャーとして携わっていたシステム開発で、品質上の不具合から半分をやり直す状況に陥った。各プロセスでの確認に甘さがあったことに気が付けず、きちんとマネジメントできていなかったと責任を痛感した。スケジュールも遅延していたため、毎日帰宅時間が遅くなり、子どもたちからは「今日も遅いの？」というプレッシャーもあった。「先が見えない暗闇で、いつになったら光が見えるのだろう」と思うほど辛かったと振り返る。この失敗を糧に、それまで以上に品質面に目を配り、確認を徹底した次のプロジェクトでは、社内の優秀プロジェクトとして「マネジメント賞」を受賞。「納期も大切だけれど、

マネジメントと子育て両立の ロールモデルに

ビジネスソリューション3部

長嶋 美穂

ながしまみほ



お客さまが求めているのは、今は品質が一番なのではないか」という思いで、納期と品質の両方をマネジメントした長嶋にびつたりの評価となった。

発言力を 身に付けることに期待

マネジャーにとって重要な仕事とは、自分のチームをうまく管理し、その状況をお客さまに報告することと考える長嶋。チームマネジメントにおいて、メンバーのモチベーションを上げるような声がけや、明確な仕事の指示出しが必要不可欠だという。「はつきりものが言える人や、話術に優れている人はマネジメントに向いていると思う。相手に不快な思いをさせない伝え方も大切」。若手社員に

産休と育児を取得し、仕事に子育てに奔走する。そうした中でも、入社当時からのお客さまである大手ベンダー企業の場合、今も担当し、長年にわたるお付き合いで確かな信頼関係を築いてきている。

また、仕事と子育てを両立する長嶋に、周囲から「一つのタスクを担当するシステム開発業務よりも、全体を管理するマネジメント業務の方が子育てとの両立がしやすいのではないか」とアドバイスがあったという。そのアドバイスがマネジメント職としてのキャリアアップを視野に入れ、仕事に取り組みむきっかけになった。

仕事の仕方は 経験から身に付ける

これまでさまざまなプロジェクトでマネジメント経験を積み、上司からも一目置かれる交渉力と調整力を身に付けた長嶋が意識していること。それは、「お客さまの困りごとやタスクに寄り添った提案活動」だ。その時の立場や環境から求められていることを汲み取り、貢献できることは何かを自ら見つけ提案する。長嶋の強みの一端がここにある。

自身のキャリアを ロールモデルに

そんな長嶋がイメージする「匠」とは、「技術力があり、唯一無二のモノが作れる職人のような人」だ。その上で、「新卒入社以降、3人の子どもを育てながら第一線で活躍できていることは、働く女性のロールモデルになれるかもしれない」と語る。

自分には匠らしい技術力はないけれど、足りない部分はいろいろな人の力を合わせて、最終的に目指すものができればいい。マネジメントの匠らしい考え方は、長嶋が苦勞した仕事と子育ての両立。ここ数年で一般的になったテレワークは、子育て世帯にとって大きな変化だと感じている。長嶋の子どもが幼かったころは出社が基本だったが、テレワークであれば、子どもが発熱して迎えに行ったら後も自宅で仕事を継続できる。「周りの人に迷惑をかける場面が少なくなるので、今はすごく働きやすいのではないかと語る。長嶋自身と同じ。体育会系の子どもたちは、学校で運動部に所属していたこともあり、以前は休日に試合観戦に行っていたそうだ。子どもたちが大きくなった今は、休日にドライブへ行くことが多く、それがリフレッシュになっていくという。

自分のキャパシティを見極めて仕事と子育てを両立し、経験を糧にマネジメント力を伸ばし続ける長嶋に今後も期待したい。

アート作品のレンタルと 展示で活躍の場を

アイエクス・ナレッジ(以下、IKI)は、2021年11月に「持続可能な開発目標(SDGs)」の達成に向けた「IKIのSDGs宣言」を発表しました。
その宣言の中で掲げた「すべての人が生き生きと活躍できる社会の実現に貢献」という方針の下、2024年1月から外部との連携によりスタートした新たな取り組みがあります。
その取り組みをご紹介します。

アート作品の魅力を広め、 支え合い活かし合う輪をつくる

2021年11月に発表した「IKIのSDGs宣言」では、「平和と公正な社会」「すべての人が生き生きと活躍できる社会」「豊かで持続可能な社会」という3つの社会の実現に貢献するという取り組み方針を掲げています。

同宣言を発表して2年が過ぎた2024年1月、発達障がい者の社会参加や文化的な活動を支援するNPO法人たいらか様(以下、たいらか)のご協力により、当社SDGsに関するひとつの取り組みがスタートしました。

青い花瓶の花

花瓶に挿してある花が画面いっぱい描かれています。筆致には勢いがあり、花の生き生きとした姿がよく表わされています。作者は絵具を混ぜることがほとんどありません。花の赤色、茎の緑、花瓶の青、テーブルクロスの色、それぞれが原色のまま鮮やかに乗せられており、黒のテーブルがそれらの色をより際立たせています。

※サイズ: 縦46cm×横38cm



アート作品の前に「たいらか」理事長山崎友文氏(右)とIKI社長の安藤文男(左)

「たいらか」では、「利用者の子どもたち、若者たちとアートを制作し発信していく活動に取り組み、テクニクやはからいを越えたその作品の持つ力を見つめ、引き出して、一人一人の生きる力を高めていくことに繋げていきたい。そうしたアート作品の魅力をも、たくさんの人々に広め、支え合い、活かし合いの輪を広げていきたい」と考えています。また「IKIでは、人材育成や女性の活躍推進、広く次世代を担う人材の創出とその支援に取り組むことで「すべての人が生き生きと活躍できる社会」の実現に貢献することを目指しています。

そうした双方の思いが重なり、今回、「たいらか」に通う利用者が制作したアート作品を「IKI」がお借りし、本社エントランスに展示することで、空間に華を添えるオフィスアートになったのです。

当社は、これらのアート作品を社員や来訪者の皆さまにご覧いただく機会を作ること、より多くの方に興味・関心を持っていただき、その魅力を広めることに貢献できればと考えています。

今後はアート作品の定期的な入れ替えも検討していく予定です。当社へお越しの際は、ぜひご覧ください。

COLUMN

一人ひとりがアントレプレナーシップを發揮しよう!

社外取締役
黒木 彰子

アントレプレナーシップ(Entrepreneurship)という言葉をご存じの方も多いと思う。新しいアイデアやビジネスを創り出しそれを実現するプロセスを意味する。新しいアイデアを生み出し、革新的なソリューションを見つける、創造性とイノベーションがカギとなる。また、個人の努力にとどまらず優れたリーダーシップスキルとチームビルディング能力も重要となる。

私 たちをとりまくビジネス環境を見てみよう。業界地図は変化し続けている。新しい業界が生まれ発展し、これまで縁がなかった業界同士が繋がったり、かつて花形であった業界が縮小していくこともある。なぜ業界地図は変化し続けるのか。それは、社会やそこで生活し働く人々のニーズが変化するためである。企業価値を創造しなければ淘汰される。これが資本主義を支える原則のひとつである。このため、アントレプレナーシップを發揮するためには、継続的な学習と変化への適応力を持つ

ことが求められる。市場動向や技術の進化に対する感性をもち、柔軟に対応することが成功のカギとなる。

アントレプレナーシップは起業する人にも求められるもので会社勤めの自分には関係ない、と考えてしまう人もいるかもしれない。しかし、ビジネス環境の変化にタイムリーに対応していくためにも、これからは、組織に属する一人ひとりにアントレプレナーシップは求められるであろう。受け身ではなく、主体的に仕事に取り組むことで、ワクワクする経験も増えていく。一人ひとりが自分らしく存分に力を發揮し、幸福感や満足感を得られる社会になっていくであろう。

筆

者は、大学でアジアからの留学生にも産業企業研究や経営組織論の科目で教鞭を執っている。留学生が積極的に取り組む姿勢も素晴らしいが、語学学習に対する貪欲さにはさらに圧倒される。英語、中国語、日本語をマスターしたので、フランス語

とドイツ語学習に取り組んでいる学生もいる。将来アフリカを含めたグローバルな舞台で活躍することを想定しているのである。

先日、文部科学省主催の全国アントレプレナーシップ人材育成プログラムで米國バブソン大学教員による講演を日本の大学生とともに拝聴した。バブソン大学は、アントレプレナー育成分野では世界ランキング1位で、トヨタ自動車の豊田章男氏なども卒業されている名門大学である。講義後、日本の大学生が積極的に質問する姿から、日本の将来の明るい兆しが感じられた。

